



みろくの風

Vol
69



踊る先生 (研修センター落成式では先生達が楽しい舞踊をご披露)



- contents -

目次

- ダライ・ラマ法王をお迎えして 2
会長 川原英照
- 志ある教師の育成を目指して 3
専務理事 川原光祐
- 人材育成センター落成 4
ヤンゴン事務所所長 平野喜幸
- Myanmar Nowadays(ミャンマー情報) 5
- 国際派日本人養成講座 6・7
6千人のユダヤ人を救った日本人外交官
- お知らせ 8

ダライ・ラマ法王をお迎えして

会長 川原英照

昨年11月22日、ダライ・ラマ法王が福岡の寺院に見えられました。

当会は協力団体、また実行委員として、会場設営、印刷物の準備、ボランティアの手配、その他各方面に奔走致しました。

当日は80数名の日本の僧侶と8人のチベット僧侶、そして約1,600人の一般の参加者がありました。嬉しかったのは、国民総幸福を

目指す国として有名なブータンという国がありますが、そのブータンからの留学生が100人ほど来てくれました。彼らにとって法王様にお会いすることは考えられないくらいラッキーなことなのです。日本人が天皇皇后陛下にお会いすることよりもっと凄いのかもしれません。

実は彼らはダライ・ラマ法王とは日本だからお会いできるのであり、自分の国ではお会いできないお方なのです。というのも、アジアの国々の中で法王様がたびたび来られるのは日本だけなのです。台湾はもちろん、中国もそうですし東南アジアの

国々、タイやスリランカにも行かれませんが、つまり仏教国で法王様が訪問する事が出来るのは日本だけなのです。

ところで、このたび法王様をお呼びした一番の目的は、2016年の熊本震災、2017年の九州北部豪雨、そして昨年2018年の西日本

豪雨、北海道震災など、たくさんの方々の天変地異や災害で亡くなられた方々の供養と、そこからいろんな精神的痛みを持った人たちの苦しみを少しでも和らげ、亡くなった魂を救済するためでした。会場には被災者の方々も参加されて、法要とご法話会が行われました。

さて、当会アルティックは設立25周年となる14年前、その記念行事としてダライ・ラマ法王様を熊本にご招待致しました。その時は二度の法話会を催しましたが、熊本県立劇場には1,800人、当会の母体である蓮華院誕生寺では4,500人の参加者がありました。当時は、なかなか直接お会いして聞けることのない法王様のご法話に感動された方が数多くいらっしゃいました。

83歳を迎えられた法王様ですが、変わらず力強いご法話でした。お話の中で「日本には非常に大きな可能性がある。西洋文明の科学技術も世界をリードする程マスターし、しかも推進し新しい技術も次々と生み出す力も持っている。でありながら仏教の哲理をちゃんと昔から先祖伝来受け継いできている。この日本という国は世界に大きな希望を与える存

在である。私は日本に来るたびにその事を強く感じる。ただ一つ気がかりなことは、今の若い人たちに果たして仏教の生き方とか哲理とかはたしてどのくらい引き継がれ浸透しているだろうか？そのことを少し心配している。」とお話されました。

当会では、法王様を精神的支柱とするインド国内に亡命している「チベット難民」に対して20年以上支援を続けています。今年で亡命から60年が経つこの「チベット難民」の皆さんの安寧を願わずにはいられません。今後とも皆様方のご理解ご協力をお願い申し上げます。



法話をされるダライ・ラマ法王



熱心に耳を傾ける聴衆

志ある教師の育成を目指して

専務理事 川原光祐

当会は今年6月で、ミャンマーにおいて80校の学校建設を終えます。並行して80地域において様々な農村の開発事業も進めています。

一般的に途上国における学校建設というと、日本からお金を全額拠出して、学校を建ててあげることが目的とされています。しかし当会の事業では少し違っています。たとえ貧困な地域であっても建設費の4分の1の費用を建設地域の人々が自ら集めて拠出することを義務付けているのです。つまりその地域の人々が教育の意義や必要性を十分に理解し、学校建設に対して情熱と意欲がある事が重要なのです。



落成式でテープカットを行う専務理事(左から3番目)。

ところで、地域で集めた4分の1のお金は、一旦は学校建設の費用として使われますが、その後学校を継続して運営する為や、地域を発展させる為の農村開発事業費として当会が「出資」するという形で村に返還します。

村の中には、この一連の事業のために学校建設委員会や農村開発委員会が設立されています。彼らが中心となって、この「出資」されたお金の使い道を自ら議論し、企画を立てて様々な事業を推進していきます。このことが地域の自助自立に繋がるのです。

前述のように80校を建設したそれぞれの地域では、それぞれの農村開発の事業が進んでいます。それらの地域をサポートするために、当会では年に二度のセミナーを開催しています。自分達の活動を発表したり、他の地域での活動の様子を聞く機会を設ける事で、評価の低い地域の方々にとっては良い刺激となり、高く評価された地域の方々には自信を深めて頂き、それぞれの地域の活動がますます充実したものになると確信します。

学校建設を進めて行く中で、生徒を教育する教師の質も課題になって



研修センター(左は宿泊棟)

した(ミャンマーではNGOだからといって、勝手に事業を行うことは許されません)。しかし、当会の現地責任者の平野所長は時間をかけて政府や地域に対して粘り強く説得と交渉を続けました。その結果政府の許可も降り、元校長先生だった優秀な講師陣も揃い、このたびの研修センターの設立そして落成に至りました。

この研修センターは、一週間の研修を年に6回行う予定で、一度に30人を受け入れます。

研修では若い教師の意識の向上を目指しており、次の6項目を重要課題としています。

- 1、教育者としての自覚を持つ
- 2、尊敬される教師を目指す
- 3、生徒の事を考えられる教師となる
- 4、自分で考える事を学ばせる教師となる
- 5、皆で協力する事の大切さを教える
- 6、体を動かす授業をする

きました。ミャンマーでは1960年代から50年以上も軍事政権が続きました。その間、医師を育てる医学学校や軍人を教育する防衛大学には立派な教育が行われてきましたが、一般的な文系や理工系などの大学では「教養を身に付け過ぎると、政府に反発し、民主化運動などを行う人間が増える」との理由で殆ど授業が行われる事も無いままに、卒業証書や教員免許を授与されてきたそうです。したがって、教師としての使命感や責任感の薄い先生達も多く見受けられます。

そこで当会では主に先生達を対象とする人材育成の研修センターの立ち上げを模索しました。当初この計画には政府はあまり関心を示さず、同意を得られることができませんで

ミャンマーの首都ネピドーやヤンゴンには、国が設立した教育センターがすでに3ヶ所あります。当会の教育センターでのカリキュラムが成果をあげ、これらの国の教育センターで採用されるようになり、ミャンマー全土にまで影響が広がっていく事を願っています。

人材育成研修センター落成
「教師の人材育成研修始まる」



ミャンマー事務所所長
平野喜幸

いよいよ、人材育成研修センターが完成しました（パンタノウ「ミミンガユ村」）。イラワジ管区カレン民族大臣やイラワジ管区教育事務所長、建設費寄付者の大竹亮一さんなどのご臨席を頂き、11月17日に地域をあげての落成式が執り行われました。

落成式に先立って、11月15日から一回目の教師研修が始められました。研修生はイラワジ管区（州にあたる）の各所から推薦により選りすぐられた教師歴5年以下の小学校教師30名が集まりました。

まず今回の研修では、教育省を退官された先生方から、地元の人材で



チームビルディング研修

ある、元・国連事務総長ウ・タント氏についての講義や「志」、「規律」の大切さなどについて、自らの体験を交えての講義がありました。

また、日本からも講師を招いて、ワークショップやレクレーションリーダー研修、囲碁、ラグビー研修など、知識やテクニックだけではなく、「考えて決断して動く」をテーマにした参加型のものを多く取り入れ



レクレーション

ました。スクール形式でじつと講師の話聞くだけではない、これまでのミャンマーにはあまりなかった研修の形となりました。

私は最近当会で作成した「素直な心」をテーマにしたミャンマー語訳の冊子を使い、読書の意義や方法等について実践を交えながら講義を行いました。また、プロジェクトマネージャーのクワンイー（当会スタッフ）は、プロジェクトを使ってSMART GOALやグループディスカッションの講義を行いました。

僅か6日間の短い研修でしたが、



囲碁ゲームを使っでの研修



先生達自身も楽しい伝統舞などを披露

研修生として参加した先生達やイラワジ管区教育事務所関係者からは、「このようなアクティブな研修は初めてだ、とても楽しく、そして大変役にたった」と非常に高い評価を頂きました。

Myanmar Nowadays

ミャンマーあれこれ

交通事情



ミャンマーの大都市ヤンゴンの街中で見かける自動車は殆どが日本車です。中でもトヨタ車が数多く走っています。これらの日本車は日本製の中古車ですが、「日本の中古車は新車のように綺麗だし、品質が良いので新車のように長く乗ることができると」ので圧倒的人気です。「憧れの的」と言っても過言ではありません。

中には「〇〇保育園」と書かれたマイクロバスや「〇〇運送」と書かれたトラックなどが走っています。もちろんこれらも中古車として日本から輸入されたものですが、made in Japan が分かるようにあえて消さずに走っているそうです。日本人としてはとても誇らしいです。

ところで、ミャンマーは日本と逆で車は右側通行です。ところが日本から輸入する車は左側通行の日本で作った右ハンドル車です。これは大

きな問題です。ミャンマーの道は中央分離帯どころか、中央線も引かれてない道なので、追い越す時は大きく左側にはみ出して前方から対向車がきているかどうかを確認しなければなりません。スキがあれば加速して追い越しをかけます。結構なスリルです。

期待の星

「環状線」



ヤンゴンを車で走ると必ずぶつかるのが交通渋滞。民主化の影響もあって、街の人口は爆発的に増加しており、バスや車も当然増えています。道路の整備も進んではいますが、人口の増加には追い付かず、朝夕の交通渋滞は大きな社会問題となっています。

そこで期待されているのが、ヤンゴンの山手線と環状線列車です。一部は100年以上も前に作られ、環状になったのは60年ほど前。長い間未整備だったため、線路が曲がっ

ていたり、車両も老朽化のため平均時速は15km（山手線の半分以下）。

そこで、日本の支援により整備が始まっています。線路を整備して、システムや新しい車両も導入し、高架橋やトンネルを作って繁華街やオフィス街とのアクセスを高めて、通勤をはじめ都市部の足としての機能を高める計画です。今は、「ノロノロで便数も少なく不便だが安いので仕方なく使う」という人が殆どですが、数年後はスーツ姿の人やおしゃれなご婦人がたが、競って使うような鉄道に変身していることを願います。

韓流ドラマ



ミャンマーのホテルでテレビをつけると、韓流ドラマの多いことに驚かされます。これはずいぶん前から直接、間接的に国策として国のお金を使って行われているそうです。一方、日本のものは殆ど見かけません。ネットがまだまだ浸透していないミャンマーではテレビの持つ影響力はとても大きいのです。そのことを感じたのは、学校を建てたある村で、

日本に対する印象を聞いた時でした。村の女性から、「日帝時代の日本の軍隊が恐ろしい」という感想が出てきました。この女性は40歳そこそこなので、当然実際に恐ろしい目にあっただけではありません。テレビドラマを見て、そう感じていたのです。ご存知のように中韓の映画やドラマでは日本の軍隊は残虐で無慈悲なイメージに作られています。一方では、韓国の楽しいキャンパスライフや近代的なオフィスで颯爽と働く男女の恋愛などが描かれており、ミャンマー人は韓国に親近感や憧れさえ感じています。イメージというものはとても大切です。何か物を購入する時でも、性能や耐久性ではなく、イメージで買ってしまうことが多いからです。私達NCOが地道にミャンマーのためにつくしても、テレビには勝てないと落胆していたところ、良いニュースが飛び込んできました。「日本の官民ファンド（出資会社）がミャンマーにドラマや観光などの日本のテレビ番組を輸出する事業を始める」というものでした。日本の規律正しさや清潔感など、良い文化がミャンマーの社会に伝わり、少しでも発展の役に立てば幸いです。

国際派日本人養成講座



人物探訪：
杉浦千畝・命のビザ

— 6千人のユダヤ人を救った
日本人外交官 —

1 押し寄せたユダヤ人群衆

1940年（昭和15年）7月27日朝、バルト海沿岸の小国リトアニアの日本領事館に勤務していた杉原千畝（ちうね）領事は、いつもとは違って、外がやけに騒がしいの気がついた。窓の外を見ると、建物の回りをびっしりと黒い人の群れが埋め尽くしている。

ポーイのバリスラフは、すでに群衆に会って、その理由を尋ねてきていた。ポーランドからナチスの手を逃れてここまで歩いてやってきたユダヤ人達で、これから日本経由でアメリカやイスラエルに逃げようとして、通過ビザを求めている、今は200人ほどだが、数日中に何千人にも増えるだろう、と言う。前年9月、ナチス・ドイツとソ連

の密約により、両軍がポーランドに同時に攻め込み、東西に二分割していた。そのドイツ軍占領地から、ユダヤ人狩りを逃れて、三々五々、このバルト海に面したリトアニアまで避難してきた人々であった。すでにオランダもフランスもドイツに破れ、ナチスから逃れる道は、シベリアー日本経由の道しか残されていないかった。

「ビザを待つ人群に父親の手を握る幼な子はいたく顔汚れをり」

（幸子夫人、以下同じ）

2 杉原領事の苦悩と決断

これほど多くの人々にビザを出すことは、領事の権限ではできない事だった。外務省に暗号電報で許可を求めたが、回答は「否」。日独伊三国同盟を目指す方針の下で、ドイツに敵対するような行為は認められなかった。

しかし、ビザを出さなければ、外のユダヤ人達の命はない。杉原領事はあきらめずに二度、三度と電報を打つ。8月3日には、ソ連がドイツとの密約通り、リトアニアを正式に併合し、日本領事館にも8月中の退去命令を出した。日本の

外務省からも、「早く撤収せよ」との指示が来る。

「ビザ交付の決断に迷い眠れざる夫のベッドの軋むを聞けり」

ついに意を決して、杉原は夫人に言った。

「幸子、私は外務省に背いて、領事の権限でビザを出すことにする。いいだろう？」

「あとで、私たちはどうなるか分りませんけれど、そうしてください。」私の心も夫とひとつでした。大勢の命が私たちにかかっているのですから。

夫は外務省を辞めさせられることも覚悟していました。「いざとなれば、ロシア語で食べていくぐらいはできるだろう」とつぶやくように言った夫の言葉には、やはりぬぐい切れない不安が感じられました。「大丈夫だよ。ナチスに問題にされるときも、家族にまでは手は出さない」それだけの覚悟がなければ、できないことでした。

3 書き続けたビザ

夫が表に出て、鉄柵越しに「ビザを発行する」と告げた時、人々の表情には電気が走ったようでした。一

瞬の沈黙と、その後のどよめき。抱き合ってキスし合う姿、天に向かつて手を広げ感謝の祈りを捧げる人、子供を抱き上げて喜びを押さえきれない母親。窓から見ている私にも、その喜びが伝わってきました。

それから約1ヶ月間、退去期限ギリギリまで、杉原は朝から晩まで一日300枚を目標にビザを書き続けた。すべてを手書きで一人一人の名前を間違えないように書く。途中で万年筆も折れ、ペンにインクをつけて書く。効率を上げるために、番号付けや手数料徴収もやめた。一日が終わると、ベッドに倒れ込み、夫人が腕をマッサージしていると数分で眠り込む。

外には大勢のユダヤ人が順番を待つ朝から晩まで立っている。やっと順番が巡ってきて、ひざまづいて杉原の足もとにキスをする女性もいた。夜はもう寒いのに、近くの公園で野宿して順番を待つ人もいた。

ソ連から退去命令が何度も来て、杉原はついに8月28日に領事館を閉鎖して、ホテルに移った。領事館に張り紙をしておいたので、ここにもユダヤ人がやってきた。ありあわせの紙でビザを書き続ける。

4 バンザイ、ニッポン

9月1日の早朝、退去期限が過ぎ、ベルリン行きの国際列車に乗り込んだ。ここにもビザを求めて何人かの人が来ていた。窓から身を乗り出して杉原はビザを書き続けた。ついに汽車が走り出す。

【走り出づる列車の窓に縋りくる手に渡さるる命の「ビザ」は】

「許してください、私にはもう書けない。みなさんのご無事を祈っています。」夫は苦しそうに言う。ホームに立つユダヤ人たちに深くかど頭を下げました。茫然と立ち尽くす人々の顔が、目に焼き付いています。「バンザイ、ニッポン」誰かが叫びました。夫はビザを渡す時、一人一人に「バンザイ、ニッポン」と叫ばせていました。外交官だった夫は、祖国日本を愛していました。夫への感謝が祖国日本への感謝につながってくれる事を期待していたのでしよう。「スギハアラ。私たちはあなたを忘れません。もう一度あなたにお会いしますよ」列車と並んで泣きながら走ってきた人が、私たちの姿が見えなくなるまで何度も叫び続けていました。

5 日本へ

ビザを受け取ったユダヤ人達は、数百人毎の集団となって、身動きができないほど詰め込まれた列車で、数週間をかけて、シベリアを横断した。ウラジオストックの日本総領事は、杉原をよく知っていて、杉原の発行した正式なビザを持つ人を通さないと海外に対する信用を失うことになる。と外務省を説得した。

日本郵船のハルピン丸が、ウラジオストックと敦賀の間を週一回往復してユダヤ人達を運んだ。船は小さく、日本海の荒波で激しく揺れ、ユダヤ人達は雑魚寝の状態で酔いと寒さに耐えながら日本に向かった。それでもソ連の領海を出た時は、ユダヤ人の間で歌声が起った。シベリア鉄道では歌を歌うことさえ許されなかったのだ。

昭和15年10月6日から、翌16年6月までの10ヶ月間で、1万5千人のユダヤ人がハルピン丸で日本に渡ったと記録されている。敦賀から神戸に向かい、神戸のユダヤ人協会、キリスト教団、赤十字などの援助を受けた。「日本人はやさしかった」と、あるユダヤ人は後に杉原夫人に語っている。神戸と

横浜からユダヤ人達はイスラエルやアメリカに渡っていった。

6 28年間探しつづけた

敗戦後、日本に戻った杉原は、外務省を退職させられた。占領軍総司令部から各省の職員を減らすようにという命令が出たのだが、「やはり命令に背いてビザを出した事が問題にされているのか」とも思った。杉原は黙って外務省を去った。

その杉原にイスラエル大使館から電話があつたのは、昭和43年8月の事だった。杉原に救われた一人、ニシユリという人が参事官として在日大使館に勤務していた。ユダヤ人達は28年間も杉原を探して、ようやく見つけたのであつた。

ニシユリは、杉原に会うと、一枚のぼろぼろになった紙を見せた。杉原からもらったビザである。そして杉原の手をかたく握って、涙を流した。

7 私たちはあなたを忘れません

翌昭和44年、杉原は招待されてイスラエルを訪問した。出迎えたのは

バルハフティック宗教大臣。領事館でユダヤ人代表として杉原に交渉した人物である。

バルハフティック大臣は、杉原をエルサレム郊外にあるヤド・バシエムという記念館に案内した。ホロコーストの犠牲者を追悼するとともに、ユダヤ人を救った外国人を讃えるための記念館である。

杉原はそこに記念樹を植え、勲章を受け取った。その記念館には「記憶せよ、忘るるなかれ」という言葉が刻まれている。

昭和60年1月、杉原はイスラエル政府から「諸国民の中の正義の人賞」を授けられた。日本人としては初めての受賞である。すでに病床にあつた杉原の代わりに、夫と長男がイスラエル大使館での授賞式に参加した。杉原は病床のまま、翌昭和61年7月31日に亡くなった。

この文章はホームページ『国際派日本人養成講座』より引用したものです。この講座には、学校では教わらない真実の日本史や知らなかった日本の偉人伝が満載です。ご家庭や学校で利用できるものが多数掲載されているお薦めのサイトです。

<http://blog.iog-net.jp/>

編集・発行／伊勢雅臣氏

愛のお年玉募金

アジアの恵まれない子供たちに『お年玉』を!

3年前私たちの地元熊本は大きな震災に見舞われました。日本各地はもとより、世界の国々からも心配と慰めのお声掛けや緊急支援物資を数多く頂きました。人が困難な状況にある時に、他人からの思いやりがいかに心強く、ありがたいものであるかを身をもって知ることができました。

さて、途上国では日常が飢餓、難民、貧困、人権、教育など社会構造的な困難が溢れています。

皆様には毎年「お年玉募金」をお願いしています。これは恒常的に困難に喘ぐアジアの人々への幸せのおすそ分けと考えています。目的と金額は以下の通りです。

学校建設事業支援 (ミャンマー農村部)

この募金はミャンマーの貧困地域における、学校建設の資金や備品の整備のために使われます。教育環境を充実させることで、より多くの子供たちに教育の機会を与えます。

一口：10,000円

本をプレゼント (チベット難民)

チベット地方(中国チベット自治区や、青海省、四川省など)からインドに逃れている難民の子供たちにチベット語の物語や小説、副読本をプレゼント。

一口：5,000円 (5,000円でおよそ10冊の本を作成できます)

おまかせ募金

特に寄付金の用途を指定せず、当会に一任して頂ける場合の募金です。 **おいくらでも**

皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

寄付のお願い

れんげ国際ボランティア会はNGO(またはNPO)と呼ばれる民間の国際協力団体です。ODA(政府開発援助)とは異なり資金力がありません。しかし資金的には小規模であっても、本当に必要な人々に、心のこもった支援ができるよう努力を致しております。その努力が実り、活動に関しては、外務省や現地の人々から高い評価を頂いています(認定NPOとしても認定)。

今後もアジアの人々が日本に対して親近感を抱き、友好関係を築けるような有効な支援事業を続けてまいりたいと考えています。何卒、活動へのご理解を頂き、活動資金へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会の維持運営費

各種ボランティア活動を行うためには、現地への旅費交通費、現場との通信費、事務所の維持費(本部や現地)、現地スタッフの給与などが必要となります。このように活動を下支えするための重要な募金が維持会費です。

一口：年間 5,000円

■振込用紙は毎号お入れしています■

これは事務作業の手間を省くためと、「思い立ったときにいつでも振り込みできるように、いつも入れておいて欲しい」という要望があるためです。決して振り込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、既にお振り込み頂いた方、ご不要の方はご処分をお願い致します。

第69号 2019(平成31年)1月

季刊/みろくの風(れんげ国際ボランティア会会報)

発行人/川原英照

住所/〒865-0065

熊本県玉名市築地2288

電話/0968(73)4851

◇各種お問い合わせ◇

(認定NPO法人)

れんげ国際ボランティア会

<http://reng.e.asia>

e-mail artic@reng.e.asia

[@reng.e.artic](https://www.facebook.com/reng.e.artic)